

重曹で美しい川を未来へ

静岡市内小学校

稲木 さん

「米のとき汁につけてね！その後、重曹をかけてねー。」

ぼくは毎年、ホールアース自然学校という所にキャンプに行き、川や森の自然の中で思いっきり遊んでいます。

ホールアース自然学校では、ご飯の片付けの方法が変わっています。始めに、残飯をザルに入れ、ゴムベラやボロ布で皿の汚れをとります。残飯は、にわとりのご飯になります。食器を洗う時は、米のとき汁につけてからスポンジでこすります。汚れが取れない場合は重曹をかけてこするとピカピカになります。

ぼくは、重曹を使うと自然にとってどんな良いことがあるのかわからないと思いました。始めに、ぼく達が普段使っている洗剤と重曹のちがいを調べました。食器洗いや洗たくなどに使っている合成洗剤には、石油から作られた「合成界面活性剤」という有機物が使われています。これは、自然界には存在しない物質なので、微生物が分解して無機物にする必要があります。そのためにはすごく時間がかかるので、自然や微生物に負担がかかるし分解しきれないと水が汚れてしまうそうです。

一方、重曹は塩と二酸化炭素から作られていて、元から自然界や体の中にも存在している物なので、川に流れても害がないそうです。

次に、重曹の効果的な使い方を調べました。重曹は弱アルカリ性なので、酸性の油汚れを落とすのに最適だそうです。実際にぼくが使ってみた結果は次のとおりです。最初に汚れを水で流したり布でふいたりすると少ない重曹で汚れが取れました。スポンジに重曹をかけて洗うときれいになりました。もともと汚れがひどい場合は、直接重曹をかけて油となじませてから洗うと取れやすかったです。どうしても取れない時は、重曹と洗剤一、二てきをスポンジに付けてこするとピカピカになりました。重曹だけで油汚れが取れると思ったけれど、取れなくて何度も洗い直して時間や水や重曹がもったいなくなりました。洗剤も必要だと分かりました。

いつも何気なく使っている洗剤によって、川や回りの自然が破壊され、生き物が死んだり、汚染された生き物を口にするぼく達の体に影響が出たりするということが分かって、びっくりしました。だから、ぼくは、「合成界面活性剤」が入っている合成洗剤を汚れに合わせて少なくし、重曹を使っていきたいと思います。ぼく一人で行うことはわずかだけれど、みんなが重曹を使ったら洗剤も水も使う量が少なくなるので、川や海がきれいになると思います。

ホールアース自然学校の川のように底まで見えて魚がたくさん泳いでいます。

でいるとうめいな川が未来にも残っていてほしいと思います。そして、
そのような川が増えて、みんなで楽しく遊べるようになると思います。
思いました。

「藤沢メダカ」を守ろう

裾野市内中学校

中野さん

大型連休が始まる一週間前の日曜日。藤沢市議会議員選挙の投票に行く母と一緒に、私は市民センターを訪れた。母が投票ブースに入っている間、ロビーの掲示板を何気なく眺めていた私の目に、「藤沢メダカを守ろう」の文字が飛び込んできた。「藤沢メダカ?」「守る?」
—私は毎年、湘南海岸での活動や清掃ボランティアに参加し、地元への関心度は高いつもりでいたが、またひとつ新たな地域情報を得て、好奇心が沸き立った。そして、地元の自然環境や生態系について調べ、理解を深めることにした。

私が住んでいる神奈川県藤沢市鵜沼は、かつては境川が大きく曲がりながら流れ、“川袋”^{かわいり}と呼ばれていたそうだ。この地域は、水田と蓮池が共存し、春にはメダカ、夏にはヤゴ、秋にはトンボなどの湿地生物の宝庫だったという。中でもメダカは、私たち日本人にとって馴染み深い淡水魚であり、生息地特有の進化を遂げてきた。そのため、水系ごとに特徴的な遺伝子や形、色を持っていた。しかし、人口増加と共に宅地開発が行われ、水田や池は減少し、河川護岸はコンクリートで覆われ、鵜沼の蓮池の生態バランスは崩れていったのだ。ついに

平成二年頃には、藤沢市内からメダカの姿は消え、環境庁によって絶滅危惧種として登録された。

ところが平成七年に、まるで秘宝が発見されたかのようなニュースが舞い込んできた。蓮池の環境が良好だった頃に採取されたメダカの子孫が、今や千匹にも増えて、近隣民家の庭池で生き延びていたのだ。DNA鑑定の結果、このメダカたちは境川水系の純粋在来種であると判明し、「藤沢メダカ」と命名された。鵜沼の蓮池は、私の自宅から自転車で十分とかわからない。こんな身近な場所で、これほど劇的な出来事が起きていたことに、私は衝撃を受けた。蓮池からの捕獲は偶然だったのか、それとも不安な将来を予測してのことだったのかは定かでないが、まさに“奇跡の再発見”と言えるだろう。

そして、この朗報直後、藤沢メダカ保護団体を中心として、江ノ島水族館や地元の小中学校、行政へと支援の輪が、またたく間に広がった。市民の団結力とスピード感あふれる行動力に、私は感動すら覚えた。現在は、教育文化センター指導のもと、約一四〇〇世帯の市民に藤沢メダカが配布され、飼育数も順調に増加している。しかし、難局を一つ乗り越えようと、またさらなる難問が生じることを、私は知った。
保護団体の資料によれば、藤沢メダカを人の手で飼育し続けると、メダカの自然本能や特有の遺伝子が、やがては消失してしまうそうだ。そこで平成二十六年に、一一〇〇匹の藤沢メダカを約六〇年ぶりに故

郷の蓮池に放流し、野生化を促す試みがなされた。しかし、蓮池には天敵のザリガニが住み、他の地域から持ち込まれた別種のメダカとの交雑により、藤沢メダカのDNAが失われるリスクも懸念された。放流後も、蓮池の調査が慎重に続けられている報告書を読み、私は保護団体の熱意を感じた。

久々に太陽が顔を出した連休の中日、私は蓮池へと自転車を走らせた。「藤沢メダカが安心して暮らせるように、他のメダカやカメなどを放流したり、むやみに捕獲しないでください。」と、蓮池の立て看板が注意を呼びかけていた。水面をのぞくと、黒みを帯びた藤沢メダカが、蓮の葉の間をスイスイ、ツーツイと、元気に泳ぎ回っていた。天敵にも負けず、自然環境に順応している様子は、私には逞しく見えた。その一方で、絶滅の危機に直面している状況を見ると、この小さな一匹一匹の存在が、とても貴重に映った。帰る途中で立ち寄った老舗ケーキ店では、藤沢メダカをモチーフにしたサブシが販売されており、地域ぐるみでの保護活動を実感した。

歴史をたどると鶴沼は、志賀直哉や芥川龍之介らの文人が執筆活動に没頭し、画家の岸田劉生が作品に描いた風光明媚な別荘地であった。その地で今、環境保全や自然保護を叫ばなければならないのは残念だ。自然治癒力に頼るのではなく、私たちは知恵と技術を結集して、失われた景観をよみがえらせる責任を果たすべきである。

来年、藤沢市は東京五輪のセーリング会場となる。現在、あちらこちらで整備が進み、藤沢駅周辺も様変わりしている。アピールのあんな大きな変化の裏で、藤沢メダカを守るための地道な努力は続いている。今回、私は藤沢メダカについて学んだことで、ますます地元に着を感じるようになった。これからも、積極的に海岸清掃を続けていこう。川や池の小さな生物を思いやる心のゆとりを持とう。正しい生態系を守るため、水を汚さないという当然のマナーを実践しよう。一人一人の心がけが、必ず実を結ぶ。継続は力なり。

いわ田市のゴミルール

磐田市内小学校

佐藤 さん

ぼくは三月にいわ田に引っこして来た。引っこして来ておどろいたのは、ゴミの分べつがきびしい事。ゴミぶくろはきまってるし、名前を書かないといけない。名前を書いてても、ルールを守っていないのは、回しゅうしてくれない。だから、シューズのカンもおかしのぶくろも、あらってかわかして出す。これまで住んでたかな川県はなんでもすきなだけ出せたから、引っこしてすくは大へんだった。

ぼくのマンションはゴミ当番もある。ゴミすて場の前でみんなのゴミせいをするなんて、かな川ではなかった。

うちがもえないゴミの当番だった時、母さんは「よごれるから家でまってるね」って言ってたけど他の人も本当にルールを守ってるか知りたくてついて行ってみた。

ぼくはおどろいた。みんなきれいにあらった物を、ゴミぶくろに入れて出していた。でも中には、もえるゴミをませてる人もいた。きつと回しゅうはされなれなと思った。

ぼくに「ゴミのせいはできないから、ゴミを出しに来た人に」おはようございます」と言い続けた。そしたら、「ぼく、えらいね」と言

ってくれる人がたくさんいた。ゴミすて場はすごいおいで気もちわるくなったけど、色々べん強になった。

ゴミすて場にカラスがいらないのもおどろいた。かな川のゴミすて場はいつもカラスがいっぱいで、ゴミを出す時つかれないようになげ入れたりしてた。道にもゴミがふつうに落ちてた。でもいわ田はルールがきびしい分、みんな一生けんめいやるから、カラスが来ないし、町全体がきれいになる。

でもぼくは一つき間がある。ゴミぶくろがきまってる事だ。かな川にいた時、母さんは、何回も使ったしじぶくろがポロポロになって穴があいたら、さい後にテープをはってゴミぶくろにして出した。でも、いわ田は、ゴミぶくろをわざわざ買わないといけない。新しく買ったきれいなぶくろを、すくゴミに出すのはよくないと思う。何でもポロポロになるまで大切につかって、仕方なくすてないといけないと思う。だからかな川みたいにとんなぶくろでもいい方が、かんきょうにやさしい気もする。かといって、どのぶくろでもいいと言えば、かな川のようにゴミ出しほうだいで、ゴミがあふれるかもしれない。それに、いわ田はゴミぶくろの大きさをねだんがちがうから、なるべく一まいですますため、ゴミをいらそうと思える。大きいぶくろでも小さいぶくろでもいいなら、たくさん出してもわるい気がしなくなる。ゴミしゅ理にはすくお金がかかると聞いたけどそれがわからなくなる。

どちら正しいことがあるかわかることもある。どちらが正しいのか
まだわからないから、また当番の日に、色々な人に聞いて、考え続け
ようと思った。

自然を守り環境を豊かに

浜松市内小学校

山本 さん

「そこに捨てていいの？」

海に捨てたら生き物達がけがをしてしまう。

学校の行事でよく湖岸清そうを行う。ボールやライターやカン、ペットボトルなどがたくさん落ちているところわくて、生き物が心配で手が止まってしまう。このライターで生き物達はけがをしなかったか。

この前は角がとがった土台や、ものすごく長い鉄パイプが落ちていた。雨の日の次の日はゴミがものすごく流されてきてゴミが大りようになる。

一年生から五年生は軍手で、六年生は火ばさみでゴミを集める。全部で八ふくろほどのゴミが集まった。八ふくろぶん生き物たちがくらしやすくなってくれたかもしれない。と考えるとうれしくなる。

冬になるとカモがわたって浜名湖に飛んでくる。昨年の冬には、家の近くにコウノトリがやってきた。それだけ湖がきれいになり、ここに来たいと思ったのかな、と思うと湖岸清そうをやったかいがある。

この夏、清そうした湖をみんなで遠泳した。泳いでいたら一ヶ所ペットボトルがたくさんあり、きけんだった。ペットボトルから遠回り

をして、ゴールを目指した。泳いでいる時に、生き物たちがこんなに大変な苦勞をしていると知ると心がいたくなった。生き物たちはごみいっぱいの中でいやな苦しい気持ちになっているんだ。と初めて気がついた。

その時、これからはどうしたらいいか考えた。

その一。ゴミを捨てないようによびかけをする。

その二。月に一回湖岸清そうを行う。

その三。どうしてゴミを捨てるのか原因を調べる。

その四。ポスターや標語を作り、はる。

この四つを守れば生き物がふえるかもしれない。生き物がふえれば自然がふえる。自然がふえれば環境が良くなる。いいことばかりだからまたみんなにいてほしい。

自分達の力で、自然を守り、大事にしていくことが人間にも生き物にも安全でくらしやすくなると思う。

身の周りのかんきょう

浜松市内小学校

岡部 さん

ぼくは身の周りのかんきょうを守っていくために、日々いろいろなことをしています。

例を挙げると、木に引っかけたビニール袋を取って処分したり、生ゴミはコンポストに入れたりするなどです。

なぜ、このようなことをしているかというと今、廃プラと地球温暖化などの問題が起こっているからです。だから、海に行った時には袋を持っていき捨ってから帰りたいです。

次は節約についてです。ぼくは夏休みの間、三つの節約に力を入れました。

一つ目は電気です。なるべく電気を使わないために、食べられる量だけご飯を作ってもらい、後で温める分の電気を使わなくて、いいようにして節電しました。さらに涼しい日はエアコンを使わずに、窓を開けるなど、いろいろな方法に取り組みました。そうしたので先月の電気使用量より少しだけ減っていたのでこれからも続けたいなと思いました。

二つ目は水です。ぼくは水道水を節約するために雨の日はバケツを

二つ程度外に置き、雨水をためて、その水を畑や植物や庭にまくようにしました。また、暑い日に水遊びをする時には川に行きました。その成果もあり、水道使用量が先月に比べて一立方メートルも減っていたのでうれしかったです。このようなことをみんなでやれば、水のむだ使いが減り、よりよいかんきょうになるとと思います。

三つ目は野菜などの食品の節約です。日本だけでも、一年に大量の食品ロスが出ています。そのもったいなくかわいそうな食品を減らすために、お店に行って買う時なるべくおつとめ品になっている物や割り引きシールがはってある商品を買うようにしています。もしその商品が期限切れになり、お店で処理されるとさらに食品ロスが増えてしまうからです。この取り組みを世界中に広げられるのなら、世界の食品ロスはかなり減ると思います。

このように、自分の身近なことから、何ができるかを考える人が増えれば、ぼくたちのかんきょうは、もっともっと住みやすいものになると思います。ぼくは、自分が実せんしていることをみんなに教えたり、逆にみんなが取り組んでいることを教えてもらったりして、社会全体でかんきょうを守るための活動が広がってほしいと思っています。そして、地球がいつまでも元気でいられるようにしたいです。

人の手で自然をとりもどすこと

富士宮市内小学校

佐野 さん

夏休みに家族で浜松の蒲川というところの川に遊びに行きました。その川は、緑色で水がすきとおっていて水の中にもぐると魚が見えました。川のそこからわき水がわいていました。もぐっていると岩にはりついていてたくさん魚を見つけて一匹つかまえました。

お母さんに見せてみたら、お母さんが、「もしかしてカジカじゃない。」と言うので調べたら本当に、カジカという魚でした。

カジカとは、きれいな川にしか生息できない魚だそうです。準絶滅危惧に指定されている魚だそうです。

昔は、お母さんの実家の川にもたくさんいて家でカジカを飼っていたそうです。

でも今おじいちゃんちに遊びに行ってもカジカはどこにもいません。どうしていなくなったのだろうと悲しい気持ちになりました。

ぼくは、前に読んだ本にのっていたクニマスという魚のことを思い出しました。

クニマスという魚は、昔は、秋田県の田沢湖に、生息していた魚です。水力発電所ができたことで、発電用水が湖に流れこみ一九四〇年以降に絶滅したとされました。

しかしその七十年後、山梨県西湖で発見されたそうです。なぜ秋田県にしか生息しないといわれていたクニマスが山梨県で発見されたのかというと、実は、絶滅する五年前、田沢湖のクニマスの卵を西湖に放流していたそうなのです。放流した卵がかえり、七十年かけて繁殖したのです。

人間の手でこわしてしまった自然を、もう一度ふっかつさせたのは、人間だということにぼくは、おどろきました。

クニマスは発電用水で生きられなくなってしまったけれど、おじいちゃんの家の近くの川からカジカがいなくなってしまったのはなぜなのか、おじいちゃんに聞いてみました。

おじいちゃんは、「一つは堤防ができて魚がかくれる木や大きな石がなくなってしまったこと。二つ目は、生活用水で川がよごれてしまったことだ。」と教えてくれました。

堤防も発電所も人が生きるために必要なものだと思います。でも、そのために大切な自然がうしなわれてしまうのは悲しいことです。

ぼくの将来の夢は、建築士です。色々なデザインの家を作ってみていからです。でも、川に行つて自然環境について考えてみて、ぼくは

ただ作るだけでなく、自然を大切に作る工夫をした設計のできる建築士になりたいと思いました。

八十年前、クニマスの卵を湖に放流して命をつないでくれた人たちのように、いつかまた魚たちといっしょに泳げる川がたくさんできるような環境を作っていきたいです。

わたしたちができること

富士市内小学校

佐野 さん

以前お母さんが見せてくれた動画に私は衝撃を受けました。それはストローが鼻にささった海がめを助けるものでした。この動画を見てから、私は家でも外食の時もストローを使うのをやめました。そして最近は一ニール袋を食べた奈良の鹿が死んだという記事も読みました。いかに多くのゴミが不適切な場所に捨てられているかがわかり、生き物を傷つけていることを知りました。これらのことから私はプラスチックゴミの削減について考えてみようと思いました。

まず私は、自分の家でどんな種類のプラスチックゴミがどれくらい出るのか、十日間調べてみました。今まではあまりプラスチックゴミの仕分けについて考えてなく、お母さんに任せることが多かったけど、素材でプラスチックかどうか考えたり、プラマークを確認するようにになりました。私の家では十日間で三十リットルの袋に目一杯の量のゴミが出て、食品から日用品において思った以上に多くあるのだとわかりました。

私はその中で、必要のないものと削減できるものについて考えてみました。必要のないものとしては、お菓子やめん類によく見られるトシ

イです。見映えや型崩れを防ぐためのものだと思うのですが、私は必要ないと思いました。トレイをなくすことで外の袋も小さくすることができます。お弁当用の冷凍食品も個分けトレイがなくても、お皿にのせて温めればいいのです。

削減できるものとしては、まずスーパーの惣菜売り場で使われる持ち帰り用のパックです。私はこれをエコバックやかごのように透明のエコタッパーにしたらいと思います。透明にすることで中に入っている物はわかるし、大量のパック削減になります。次にお母さんがよく飲んでいる一回使い切りの個分けにされたコーヒーです。チャック付きの袋に替えれば余計なゴミは出ません。他には食べ切りのヨーグルトのカップを紙の容器に替えたり、本を買った時に入れてもらうビニール袋を紙の袋に替えたり、調味料やペットボトルのラベルを紙に替えたりとプラスチックを削減したり、違うものに代替えることができると思います。個分けにすることは消費者にとってはとても便利です。でも利便さを求めることがプラスチックゴミを増やしている一つの原因でもあると思います。

一つの家庭でこれだけのプラスチックゴミが出るということは、日本中で計り知れないほどの量が出ているということです。処理する上でリサイクルも大切ですが、まず消費者と作る側が共に、いかにプラスチックゴミを減らせるかを考え、理解・納得して、実行していくこ

とが大事だと思いました。また何よりもゴミを捨てる場所をしっかりと守ることが環境や生態系を守ることにつながるので、一人一人が心がけていくべきだと思います。

限りある資源「水」

富士市内中学校

西尾 さん

七月十二日の朝、家の中が騒がしくて目が覚めた。

「どうしたの?」

と聞くと、

「水が出ないんだよ。」

と先に起きていた弟が言った。

母はラインで町内の人と連絡を取っていたのか、スマホが鳴りっぱなし、祖父は心配して早朝から近所の人に聞いてまわっていた。父は、

「コンビニ行くぞ。」

と私をさそった。少し離れたコンビニに着くと、

「ほら、トイレ行くよ。」

と言われた。そうか、水が出ないとトイレもできないんだ。言われるまで私は気がつかなかった。その日、学校に行くと断水の話でもちきりだった。どうやら、同じ学区でも水が出ている家と、出していない家があるらしい。何でだろう…と考えながら帰宅した。

「簡易水道のポンプが壊れたんだって。」

帰ってすぐに母が教えてくれた。しかも、修理するのに次の日の夜ま

でかかると…。夕方には、近くの公園に給水車が来てくれた。みんな、空いたペットボトルや、バケツ、給水タンクに水をくみに来ていた。

私も公園と家を二往復し、重い水を運んだ。それでも、お皿を洗うのに使って、トイレを二、三回流すのに使ったら、ほとんどなくなってしまった。困ってしまい、その日は母の実家でお風呂に入り、夕食を食べさせてもらった。銭湯に行ったり、外食したりした人も多かったらしい。次の日の朝も、コンビニで飲み物や朝ごはんのパンを買い、トイレを借りた。洗濯もできない、土曜日なのに上履きも洗えない。

歯みがきや洗顔の水は、前日の給水車からもらった水ですませた。昼食はラーメン屋で、夕食は買ってきたお弁当を食べた。夜八時過ぎ、水道をひねってみると、チョロチョロと水が出た。でもまだいつもの勢いがなかった。それでもうれしくてすぐにシャワーを浴びた。その日は地域のお祭りでおみこしを担ぎ汗だったので、チョロチョロと流れるシャワーでも、とても気持ち良かった。

この約四〇時間の断水で学んだ事、感じた事は沢山ある。まず、地震などの災害がなくても水が出なくなることがあるということ。蛇口をひねれば必ず出てくるもの…そう思っていて、まさか水が出なくなる日が来るなんて本当に驚いた。普段の生活の中で毎日どれくらいの水を使っているのだろう。気になって調べてみた。毎日必ず使用するトイレは、一回流すのに六リットルほど水を使用する。歯みがきの

時なぜか出っぱなしにしてしまう水は、たった三十秒で約六しも流してしまっている。シャワーも十五分間使うと、浴槽一杯分ほどのお湯を使用しているのだ。

飲めるほどきれいな水を捨てているなんてもったいない。そう思うようになったのは断水を経験したおかげだ。世界には、安全な水が利用できない人が六億六千三百万人もいて、トイレを利用できない人は二十四億人もいる。水道や、整備された井戸がない国の人々は、遠くにある川や池に水をくみに行っている。私は今回の断水で近所の公園に二回水をくみに行っただけでヘトヘトだった。こんなことを毎日やらなければいけない地域があるなんて信じられなかった。しかも、川や池の水はきれいではないので飲み水に使うと病気になってしまう。それが原因で、年間三十万人、一日に約八百人以上の五歳未満の子供が死亡しているという。私は心が痛んだ。私達が気づかずに流し、捨ててしまっている大量の水が、水道のない国の人々にプレゼントできたらいいのに、と思った。

なぜ水が足りなくなってしまうのかを考えた。原因の一つは人口の増加だと思う。人が増えれば単純に水を使う量も増える。もう一つの原因は気候だ。雨が降らないと干ばつになってしまう。一人一人が節水を心がければ環境のためになるのではないか。きっと、川や池に水をくみに行っている国の人達は、日々使い過ぎないようにしているに

ちがない。だって使ってしまったら、また遠くに水をくみに行かなければならないから。それに比べて日本は、蛇口をひねればいつでもきれいな水が出てくる。そんな環境で育った私達に、節水は考えにくい事なのかもしれない。私もつい最近まで、節水しようなんて思ってもいなかった。環境のために私ができること、それはささいなことかもしれないけど、これからは考えて行動しようと思った。

輝く未来の海のために

静岡市内中学校

本田 さん

「二〇五〇年の海は、魚よりもごみの方が多くなるかもしれない。」私は海のごみ拾いをするボランティアに参加したとき、この言葉に大きな衝撃を受けた。それと同時に、海の未来に少し不安を感じた。私のごみ拾いをした海には、見たことのないほど多くのごみが落ちていた。ペットボトル、大きなプラスチックかご、漁のネット、缶、発泡スチロール、瓶、そして大量のビニール袋。一時間ほどごみ拾いをしてただけで、十個以上の満タンになったごみ袋ができた。それでもまだまだあるごみを見て、私は虚しい気持ちになった。

そのとき、ニュースで話題になっていた、海のプラスチックごみについて話を聞いた。ビニール袋を飲み込んでしまって、命を落とす生き物がいることを知り、これは大変な問題だと思った。生き物のことなど気にもせずどんどん海を汚す人間は本当に勝手だ。海にごみを捨て続けた結果、関係のない海の生き物に悪影響を及ぼしてしまっている。この状況は変えることができるのだろうか。

プラスチックは軽くて丈夫で加工しやすく耐久性もあり安いいため、様々な所で利用されている。使い捨てのペットボトル、レジ袋、商品

のパッケージなどがプラスチックごみの量を増やす原因になっているそうだ。プラスチックごみの厄介な点は、「自然分解されにくい」という点だ。一度海に入ったら、海底に沈んだり、海岸にうちあげられたり、水面や水中を浮遊したり。長い時間が経ってもプラスチックごみは自然と消えることはなく、海中にたまってしまふのだ。今、海中にはどれほどのプラスチックごみがあるのだろうか。年間少なくとも八〇〇万トンものプラスチックごみが海に流れ込んでいるという。それが何年、何十年と積み重なったら、魚よりもごみが多くなる時代が来るのかもしれない。でも私は、そんな未来の海は見たくない。私は改めて未来の海に不安と危機感を覚えた。

「最近マイクロプラスチックという、目に見えないプラスチックが海に存在していて、問題視されています。」

私の耳に飛び込んできた「マイクロプラスチック」という単語。気になって調べてみると私はとても怖くなった。五ミリ以下のプラスチックをマイクロプラスチックといい、これはすでに魚などの海の生き物の体内に蓄積されていることが分かった。さらに、魚を食べる私達人間にも蓄積されている可能性があるというのだ。マイクロプラスチックには、有害物質が吸着されている。目に見えない有害なものがあるのまにか自分の体内に蓄積されていたらと思うと心配になってくる。しかし、私達人間が捨てたプラスチックごみが、私達人間の健康を害

しても、「自業自得」と言うしかない。

海のプラスチックごみ問題についてあなたはどう思っただろうか。

私は、美しい海、多様な生き物、人間の健康を保つためにも、なんとかこの状況を改善しなければいけないと思った。この作文を読んでいる人の中には、今の状況を改善したいと考える人もいれば、自分には関係ないと考える人もいるかもしれない。しかし、日本はこのプラスチックごみ問題に国際的な責任を持たなければいけない。なぜなら、日本が一年で海に流したプラスチックごみは先進国の中で二番目に多いからだ。もちろん日本だけの責任ではないが、「自分には関係ない」と他人事のように見て見ぬふりをするのは、日本人としてあるべき姿ではないと私は思う。もっと多くの人がプラスチックごみで海を汚していることを自覚し、問題に正面から向き合う必要がある。

そのためにまず、様々な年代の人に海のごみ拾いのボランティアに参加してもらいたい。海の状態を見て、聞いて、体験して、知ることができ、関心を持ってもらえるとと思う。私も積極的にボランティアに参加し、海を守る活動が続けたいと思う。ボランティアに参加することで、自分の中で少しでも変化があってくれれば嬉しい。

次に、今から始められる簡単なことを実践してほしい。ポイ捨てをしないことはもちろん、落ちているごみは必ず拾う、リサイクルをするなど、本当に簡単なことで良い。また、使い捨てプラスチックの利

用自体を減らすために、マイボトルやマイバックを活用してほしい。

手軽に使える分、手軽に捨てられてしまうプラスチック。私は、世界中の人が未来の海について考えるべきだと思う。私にはまだ、未来の海がはっきりと見えない。未来は良い方向にいくのか、悪い方向にいくのか。それを決めるのは、今を生きる私達の行動だ。一人一人が日常生活の中で意識して行動することが、美しく豊かな海をつくる第一歩になる。あなたも、その「第一歩」をふみ出しましょう。

「輝く未来の海のために」

広げよう、プラスチック撲滅の輪

富士宮市内中学校

望月 さん

私の家は酒屋をやっている。お店で接客をしたり、飲み物を配達したりする仕事だ。あともう一つ、自動販売機の中の飲み物のつめかえ、捨てられた缶やペットボトルを片付けるという大切な仕事もある。母は、この前、自動販売機の中身をつめかえると、気持ちよさそうな表情で帰ってきた。そして、

「ゴミ箱に捨てられているゴミが、いつもまちがえずに、分別されているの。」
と、うれしそうに言った。私は友達と遊んだ時に、缶やペットボトルは「安くておいしい」と言っていたのを思い出し、とても便利なものだなあと考えた。小学校の時、環境や自然を守るために、分別は大事と習った。

「じゃあ、分別すれば、ペットボトル飲料、たくさん飲んでいいのかなあ。」
思わずつぶやくと、母は少し困った顔をして

「分別をすることは大切だけど、そもそもペットボトル飲料を飲まないようにすることが大切だと思うよ。環境にも悪いしね。」

と言った。ペットボトルはプラスチック。確かに最近、私の周りからプラスチックが減ってきたような気がする。それは環境に悪いからで、分別しないのも環境に悪い。小学校でも習ったし、母の言いたいことは大体分かった。でも、直接、環境にどんな影響が出ているのか私は知らない。少し気になった。

そんな時、私達のもとに、ある新聞が届いた。そのニュースには「海洋プラスチック」と書かれていた。気になって読み進めると、こんなことが書かれていた。海に出たプラスチックは「マイクロプラスチック」というものになり、海にいる魚や、プランクトンの体内に取り入れられてしまうこと。一般的な暮らしをしている人が、マイクロプラスチックを取り込む量は、一週間でクレジットカード一枚分にあたること。また、この新聞を読んだ後母から聞いた話によれば、海で亀が泳いでいた時、浮いていたレジ袋を、くらげとかん違いして、食べてしまったという事件もあったらしい。それを聞いて私は少し怖くなった。便利だから、だけを理由にしてペットボトルを使い続ければ、この地球の環境は、どんどん悪くなってしまふ。もし、これから、このような被害を受けているということを知らない人が増えていったら、海が汚れてしまふ。でもきっと、ペットボトルをたくさん使っている人は多い。そう思って母に聞いてみた。

「お母さん、自動販売機のとなりに置いてあるゴミ箱、一回の仕事で

どれくらいたまっているの？」

「うーん、ゴミ袋二袋分くらいは、あると思うよ。」

びっくりした。ゴミ箱が大きいし、捨てようと思ったのに中にたくさんゴミが入っていて入らなかった、なんていう経験はないから、中のゴミの量は意識したことがなかった。それに、ゴミ箱が透明ではないものが多く、ほとんどが中が見えない。私が直接見たことがなかっただけで、実際はそんなにたくさんゴミがたまっていたんだ、と驚いた。

「あれ？でもお母さん、週に何回、中身つめかえたり、ゴミ片付けたりしてるの？」

「だいたい三回くらいかな。最近は暑いから冷たい飲み物がよく売れるんだよ。」

私は少し考えてみた。一回の仕事で出るゴミの量が二袋、それが週に三回ということは、一週間で六袋ものゴミが出ることになる。そんなにたくさんなら、いくら分別していたとしても、ゴミの量は減らないと思う。しかもペットボトル以外のプラスチック製品なんてたくさんある。レジ袋、ストロー、コップなどだ。しかも、洗って使えるものもあるけど考えてみると使い捨てが多い。これが海に浮いているのを想像すると、環境が悪くなるのはあたりまえだと思う。

どうしたら、環境が悪くならないか。そもそも海に、プラスチック

が浮いているのはポイ捨てが原因だと思う。海の近くでキャンプをしていて、そのゴミを海に捨てたりした。または、海から遠い所でポイ捨てをして、風などによって海に運ばれた。海につながる川にポイ捨てした、などパターンは様々だと思う。私も一度ポイ捨てをしてしまったことがある。今考えれば環境的にも人間的にも良くない行動だったと思う。だから、ポイ捨てをしないようにしていきたい。

あと一つは、プラスチックをあまり使わないようにすることだ。洗剤はつめかえ用を使ったり、出かける時は水筒を持ち歩くようにしたりして、プラスチックを減らした生活ができるようになりたい。自分ができるようになったら、仲の良い友達へ伝えて、友達からその友達へと、良い環境の輪をつくっていききたい。

一本のストローから

静岡市内中学校

大村 さん

六月にグアムの高校生がホームステイに来了。彼の好きなアニメは僕の好きなアニメと同じで、英語があまり得意ではない僕でも、アニメの話なら抵抗なく会話に入れた。彼女の話、アニメの話、食べ物の話、グアムの学校の話など、しゃべる言葉は違っけれど、僕の兄と同じ普通の高校生だった。

次の日、彼と一緒にハンバーガーを食べに行った。注文した品物が来た時、彼はカバンをあげ、布の筆入れの様な物を出した。グアムの文化では、何か特別な物があるのだろうか、と思いながら、その中身が気になった。

中には、青くてキラキラした三本のストローが入っていた。一本は細身のストロー、一本は少し太めの先の曲がったもの、一本はタピオカ用のような、とても太いもの。しかもそれぞれに洗浄用のブラシが付いている。

「Why?」

思わず口に出してしまった。彼が説明してくれたところで、僕には英語が理解できないのにマイストローを持ち歩くということにおどろいて、

思わず言ってしまった一言。ストロー同士がぶつかり、風鈴に似た涼し気な音がした。そして、彼はストローを見せながら、僕が理解できているか確かめるように、ゆっくりと、言葉を探しながら話してくれた。でも、残念な事に僕に聞き取れた単語はほんの少し。

「environment」 (環境)

「turtles」 (かめ)

「died」 (死)

「microplastics」 (マイクロプラスチック)

でも、この単語を聞き取っただけで、彼の言おうとしている事は、容易に想像できた。そして、グアムの僕達世代の約半数が、マイストローを携帯しているとも言っていた。

ハンバーガーを食べる前にそんな話を聞き僕はストローを使えなかった。グアムの高校生も僕とそんなに変わらないと思っていたのに、環境やゴミの事を真剣に考え、しかもそれを行動に移している。小学校の頃、環境問題について学習したにも関わらず、何の意識もしていなかった自分が恥かしくなって、コップから直にゴクゴク飲むしかなかった。そして彼を格好良いと思った。

僕はまず、マイクロプラスチックについて調べた。海洋環境において極めて大きな問題となっている。サンフランシスコ市では、ペットボトル飲料の販売が禁止され、フランスでは、プラスチック製の使い

捨て容器が禁止されるらしい。そんな大事なのに、日本ではせいぜいレジ袋を有料化しているスーパーがあるくらいだろうか。プラスチック製品があることで、昔の人の生活と比べたら今はすごく便利になっているが、その便利さと引き換えに海が汚染されている。人間が汚してしまった海は、人間がきれいにしなくてはならない。

自分はポイ捨てもしていないし、今の生活でマイクロプラスチックを増やすようなことはしていないと思っていただけから、今まで自分で何かしなければいけない、という思いはゼロに等しかった。でも、そうではなかった。知ってしまった以上、動かないわけにはいかなくなった。少し調べただけでも、好きな「ししゃも」は食べるのが怖くなったし、海が人間のごみ箱になってしまっている気がした。とてつもなく大きな問題だが、僕に何かできるだろうか。

すぐ出来る事は、やはりプラスチックゴミを減らす努力をする事だ。マイバックを携帯し、レジ袋をもらわない。水筒を持つようにして、ペットボトルを買わない。これは、おこづかいも減らないので一石二鳥である。留学生が実行していたストロー一本の対策のように、僕も小さな事から実行していこうと思う。

それと、学校の給食でストローを使わないよう提案してみようと思う。たった一本のストローでも、多くの生徒が毎日使わなくなればとても大きな結果になると思う。リサイクルすれば環境問題に貢献して

いる気がするがそれでは、プラスチック製品は次々と作られてしまう。だから、これからはリフューズ（断る）、リデュース（減らす）でプラスチックの使用を減らしていかなければならないと思う。

この先僕は、風鈴の音を聞くときっとあのストローを思い出すだろう。そして、自分が何をすべきか再確認する。あのストローのようなキラキラ輝く美しい海が戻ってくるように。

変わる環境、消える生き物

静岡市内中学校

櫻井 さん

「前はここに、ザリガニが沢山いたのに。」

母は、コンクリートで固められた側溝を見てそう言った。生き物の気配もしないこの側溝にザリガニがいたのかと、私は驚いた。

かつてのその側溝の壁は、小ささまざまな石で固められていた。泥底で、ザリガニが穴を掘って身を隠した。壁の石の隙間によくザリガニがいたのだと、母は言う。隠れるには好都合だったのだろう。

私は今年の夏休み、ザリガニがいる側溝や、小さな川などを探した。やはり、コンクリート化された場所には、ザリガニはいなかった。一方、ザリガニがいる場所は、少なかったがいくつか見つけられた。それらは全て、底が泥で覆われ、流れの緩やかな場所だった。

この側溝では、コンクリートによる護岸が、ザリガニの生活を大きく変えてしまったのだろう。コンクリート張りになり、身を隠せる場所がなくなる。緩やかだった水の流れも、速くなった。こうして、ザリガニが住める環境は、失われたのだ。

今まで側溝には蓋がなく、転落による怪我が多発していたらしい。転落防止のためにも、コンクリートなどで蓋を作ることは、必要だっ

たのだろう。しかし、そこら中の側溝をコンクリート化する必要はあったのだろうか。もしそこに住んでいる生き物のことを考えていたら、ザリガニが住めるような側溝も、残っていたかもしれない。

コンクリート化による影響を受けたのは、ザリガニだけではない。同じように住みかを失ったり、天敵やエサを失った生き物たちだ。

自然の中で、生き物たちは互いが繋がりがあって生きてきた。里山などで、人間の生活に適応して生きているものもある。しかし、人間が生き物たちの生活環境を完全に変わらしてしまえば、彼らはそれに対応できず、姿を消してしまう。

では、生き物がいなくなることで、人間にどのような影響があるのだろうか。まず、食料とする生き物がなくなるなどの影響がある。しかし、私が一番に感じたのは、幼少期に生き物に触れる機会が減る、ということだ。

人は幼少期、沢山の生き物とふれあう。母も弟と二人で、よくザリガニを捕って遊んだらしい。生き物にふれあった体験の一つ一つが、子どもの心の成長に繋がっていると、私は思う。子どもたちは生き物を見て、きれいだな、とか、かっこいいな、と感じる。動物園に行けば世界中の生き物を見ることができ、一番子どもたちが心を動かされるのは、自然の中で力強く生きる生き物たちの姿だろう。蝉の羽化や、虫を捕食するカマキリなどだ。

今、そんな自然も、生き物たちも、失われつつある。人間の手によって急速に変化した環境に、追いつけない生き物たちが沢山いる。私たちはこの状況を見直し、生き物たちとの共存について、考えていかなくてはいけないのだと思う。

しかし、生き物を単体で守っても意味がない。例えば、ある魚を保護し、別の場所で飼育したとする。しかし、その魚がいなくなることで、他の生き物に影響はないのだろうか。自然は全て繋がりがあっているのだから、何か一つが欠ければ、全体のバランスが崩れてしまうことだって考えられるだろう。自然そのものを守らなければ、意味がないのだ。

そのために、ビオトープを作る、ということはとても効果的だと思う。生き物たちが住めるような自然を、もう一度作り直す。そこで、自然界のバランスができれば、生き物たちは以前のように暮らせるだろうと私は思う。

私たち一人一人にできることは、まず自然を知ることだと思う。実際にふれあって、自然の力強さを体感する。これから守っていくべきものを、もう一度みつめ直すことが大切だ。

人間は自分たちの暮らしのために、環境を変えていった。地球温暖化やゴミ問題は、人間の行動が大きな原因であり、多くの生き物たちが被害を受けている。痩せ細ったホッキョクグマや、プラスチックを

飲み込んだ魚を見て、被害の大きさに気づくのだ。

もしも、自分たちの行動による、生き物たちへの影響を考えていたら。コンクリート張りの側溝で、姿を消すザリガニのことを想像できていたら。今の地球の環境は、もう少し変わっていただろうと思う。

生き物たちの自然が、人間たちの社会に飲み込まれつつある今、生き物の多様性を守るために、自分たちの行動について考えなければならぬだろう。